

山田憲太郎著『スパイスの歴史』

東西の文化および文物の交流が、中央アジア大陸を東西に結ぶ「シルクロード」によって行われたのは周知の通りである。しかしこうした東西交流は陸路だけでなく、南アジアの海岸を東西に結ぶ海路でも行われていた。これを「スパイスロード」と呼んでいる。この海路が、インド、南アジアの香辛料の伝播を中心に行っていたからで、いわゆる「海のシルクロード」である。

『スパイスの歴史』の著者山田憲太郎博士は、一九三二年神戸商大を御卒業後、香料会社（小川香料）に勤務され、業務の合間に香料の歴史、とくに東西香料史の研究を続けられ、一九五〇年に文学博士、一九七七年には日本学士院賞を受賞された、当代表格の香料・香辛料史学者である。一九八三年に病をえてお亡くなりになられたが、その業績は、十数冊の膨大な著書にまとめられ、燦然と輝いている。

一九五四年大阪大学大学院に進学した私は、恩師故木村康一先生から、正倉院薬物の研究テーマを頂いた。正倉院の薬塵中から漢薬「胡黄连」を見出し、その原植物を明らかにし、日本への渡来経路を古文獻から考察したことがある。一二〇〇年も以前に、

ヒマラヤ山中の植物がはるばる海を渡って日本に来ていたのである。その際、渡来経路を知る上で、桑田隴蔵先生の『蒲寿康の事蹟』、『東西交通史論叢』、藤田豊八先生の『東西交渉史の研究』南海篇、西域篇、石田幹之助先生の『南海に関する支那史料』など、先人の素晴らしい業績をずい分と参考にさせて戴いた。和漢薬を研究するものにとって、古代における薬の東西交渉はたいへん興味深いものがある。大黄のように東から西へ渡っていったものもあり、またアロエやケシのように西から東へ知識が伝わったものもある。そのような薬物の東西交渉を調べていると、インド・南アジア地区の香料・香辛料西漸の歴史が非常に重要なものであることがわかり、山田憲太郎先生の『東亜香料史』（一九四二年）や、岡本良知先生の『中世モルッカ諸島の香料』（一九四四年）などを何度も繙いたものである。とくに山田憲太郎先生は池田市石橋にお住いになっておられ、当時私は隣駅の蛍ヶ池の大阪大学薬学部に通っていたので、何となく親近感があった。先生のその他の著作『日本香料史』（一九四八年）、『東西香薬史』（一九五六年）、『香料の歴史—スパイスを中心に—』（一九六四年）を読んで、一度先生のお宅をご訪問し親しくお教えを請い度いと思いつきながら、一九七〇年に富山に赴任してしまつたので、ついに望みを果せなかつた。和漢薬は商品であるから、時代によりさまざまな動き方をしている。『東西香薬史』は、そうした漢薬類の動きを知る上でたいへん参考になった。桂皮、丁香、胡椒などの動きは、まさに世界を変えた感がある。

山田憲太郎先生は、『小川香料時報』の編集を担当されたこと

から、香薬類の歴史の研究を始められ、膨大な古今東西の文献を蒐集されておられたと聞き及んでいる。そうした貴重な文献を駆使して、次々と香料史、香薬史の世界を塗りかえてこられた。先生は六十歳代後半頃から、こうした知識の集積が吹き出したように、『東亜香料史研究』（一九七六年）を皮切りに次々と大部の著作を出版された。

『香料の道—鼻と舌、西・東—』（一九七七年）、『香談—東と西—』（一九七七年）、『香料—日本のおい—』（一九七八年）、『スパイスの歴史—薬味から香辛料へ—』（一九七九年）、『香薬東西』（一九八〇年）、とくに後の四冊は、先生の学問を一般の人達にわかり易く誌した四部作で、ともに法政大学出版社から出版されている。その他『香料博物事典』（一九七九年）、『南海香薬譜—スパイスルートの研究—』（一九八二年）、先生の五〇年の研究の集大成ともいえるべき書物が、お亡くなりになる一年前まで出版され続けたのである。私もこのバイタリティーにあやかりたいものと思っている。

ところで『スパイスの歴史』であるが、スパイスの代表格、胡椒、肉桂、丁香、肉荳蔻を取り上げている。それは、それらスパイスを熱望して、インド、ジャワ、スマトラ、モルッカ諸島、バングラ諸島、スリランカ、北ベトナムなどを往来した東西諸民族の交渉史である。

第一部は胡椒であるが、ヨーロッパ人の大航海時代、ひいてはインド、東南アジア諸国に対する植民地政策を促した代表選手が胡椒であることはすでに多くの人が言及している。胡椒は、イン

ド・マラバル地方原産の植物で、ヨーロッパにはギリシア・ローマ時代から知られていた。中国では唐代の『新修本草』に薬物としてはじめて収載されるが、すでに『後漢書』に胡椒の産地についての記述がある。山田憲太郎先生は、新しい観点から中国での胡椒消費の状況を、膨大な中国文献をもとにして明らかにし、胡椒に対するヨーロッパと中国の東西民族の考え方の違いを論じておられ、たいへんユニークな論説を展開されている。

第二部は丁香と肉荳蔻であるが、この二種は狭義のスパイスといえる。ヨーロッパ人の東洋進出のもっとも肝腎な目的地が、これらの唯一の原産地であるモルッカおよびバングラ諸島であった。この二種もまた中国人の受けとめ方は、あくまで薬物としてであった。そのため、ここでは中国の文献よりも、一六世紀初頭に初めて現地を踏査したポルトガル人やイスパニア人の文献を主体にして、その原産地の実状を描きだしておられる。このような記述は、本書によって初めてなされたものである。附録の肉桂、竜腦のスパイスルートの論考は、『東亜香料史研究』の記述を小論としてまとめられたもので、さらに詳細に知りたいむきには前書を繕かれることをお勧めする。また胡椒、丁香、肉荳蔻についても絶筆となられた『南海香薬譜』に多少の重複があるが、さらに詳細な論考がなされている。

ところで、かつて桂枝と桂皮の本草書の記述から、その差異を明らかにしようとしたことがあるが、実際にスリランカへ赴いてシナモンの生産状況を見聞して一気に解決したことがある。山田先生の論考は文献考察に終始しておられる。もちろんそれは歴史

的考察の常道であり、その中で詳細かつ明解な論を展開しておられるから、それに対して論議をなさむ余地もないが、もし先生が現地調査をされておられれば、違った意味で記述の多少の変化がみられたのではないかと想像する。

第三部の異聞雑色は、先生の博識の独壇場である。媚薬と香料、竜（アンバル）・麝（ムスク）の発香、楊貴妃と香など、先生ご自身は雑学の極言といっておられるが、読んでいて実に楽しい。最後の項のゴールド（金）とスパイス（香料）とアニマ（靈魂）の大航海は、マルコ・ポーロの『東方旅行記』に啓発されたコロンブスの栄光と悲劇の物語である。

こうして本書を一読して感じることは、文献上の考証を中心とした史的考察の手本というべき著作といえよう。何はさておき、山田憲太郎先生の博学にあやかるといえる意味からも、和漢薬、香料、東西交渉史などを学ぶ学徒にとって一読に価する書物である。

（難波 恒雄）

〔法政大学出版局 一九七九年 B五判 二九三頁〕

定価 一、九〇〇円）

上野益三著『博物学の愉しみ』

本書によって、『草を手にした肖像画』『忘れられた博物学』の二集と合せて博物学史に関する珠玉の随筆三部作が完成したが、著者の生存中最後の著作ともなっていました。

収載文二五編は、一見して雑然と配列されているが、次の四部

に分類できよう。一は前二集と同じく、『日本博物学史』や『日本動物学史』以降の著者の新研究や補遺的研究。二は自叙的随想。三は陸水学者としての紀行と交友の想い出。四はその他雑編である。総じて前二集に比べて論議の側面がうすれ、博物学や博物学史との個人的関わりに力点が置かれている。標題のごとく生涯を通じて「博物学の愉しみ」を心ゆくまで満喫できた著者の素晴らしい自伝的作品となっている。

一は、①「博物学者平賀鳩溪（源内）」、②「平賀鳩溪の博物学著述」、③「津島恒之進」、④「諸州薬品考」、⑤「西湖と『秘伝花鏡』」、⑥「江戸本草学の系譜」、⑦「京都本草記」、⑧「どこまでが稀観本か」の八編である。全体を通して一八世紀の江戸の本草学を博物学史的立場から論述した内容である。著者は京都の本草学と江戸の本草学をつねに対比し、前者よりは後者を高く評価している。とくに平賀源内に高い評価を与え、①では「日本で生まれた最初のナチュラルリストというのにふさわしい」と絶賛する。②は源内の著作の解題であり、「會業譜巻之一」「東都薬品會引札」「淨貞五百介図序」「紀州産物志」「救荒本草講義」「重刻秘伝花鏡六卷」「番椒譜」「物類品論六卷」の解説は著者ならではのものである。③は、物産会の草わけの一人と考えられる津島恒之進に関する新研究で、評者らが発見した恒之進の墓石と家譜をもとに『紹興校定本草図』写本の考証などに及ぶ。④は「諸州薬品考」が丹羽正伯のものではなく田村藍水著であるという考証と内容の紹介。⑤は『秘伝花鏡』が編述された杭州西湖への著者の紀行文と『花鏡』の書誌学的研究である。⑥は高木春山出現に至る

江戸本草学の略史で、「江戸へも移った本草学の分派の随一は博物学である。博物学は人間の自然に対する好奇心に触れる学問として、万人に好まれ万人を愉しませる要素を多分に持っている」「うち続く泰平の世と庶民の経済力の向上とが、生活の余裕を生み、これが博物学隆盛の一因になった。この意味で江戸時代はよい時代であった」とする歴史認識が披瀝されている。⑦はやや長編で京都の本草学史を通覧させてくれる。ここでも「京都の本草学の教師たちは保守的で権威主義であったから、共同研究活動は適し難かった。ところが江戸の本草学者の間ではグループ活動が行われて、京都よりも近代性を示した。積弊會と称した集りがそれである」と京都本草学への評価は低い。

二は、「博物学者で満員のミニ客車」、「桑田義備先生」、「黒田徳米先生」、「湖上の船出」、「蒐書と複製」、「十和田湖畔にて」、「江崎悌三君」、「京大動物学教室のころ」、「中村健児君」、「博物学はわが前にあり」、「あるスピーチ」などであり、恩師や交友に関する記述も著者の自伝の一部と読める。

三は、「アウグスト・ティーネマン」、「アレキサンダー・ルッター」四は、「リネアン協会二百周年」、「また復ニホンオオカミのこと」、「タスマニアの『悪魔』」、「ウィリアム・ヘンリー・ハドソン」などである。

著者上野益三博士（京都大学名誉教授）は平成元年六月十七日享年八十九歳で永眠された。博物学史の通史的研究で文字どおり巨歩を印された著者は近年の博物学流行に主導的役割を果された。本書はその意味でも記念碑的作品であり、ご一読をお勧めす

るとともに、この機会をお借りして心よりご冥福をお祈りしたい。

〔八坂書房 一九八九年 B六判 三二七頁 定価三、〇〇〇円〕
(遠藤 正治)

楨佐知子著『日本昔話と古代医術』

語り継がれてきた昔話の中に隠された意味をさぐる昔話研究の類書は多いが、本書は、著者が長年手がけてきた『大同類聚方』や『医心方』という古医書にみられる「古代医術」という視点から、これらを問い直し「たものであり、昔話に隠された古代医術の知恵とその実践法を解明されようとしたものである」。

第一章「桃太郎」。同話は中国の西王母の仙桃伝説をふまえた回春譚と、桃人（桃核人）の薬効を象徴する寓話として考えることができるとし、薬効・呪的効能を象徴する桃太郎が、相手を侵し滅ぼす象意をもつ動物達を家来につれて、病氣や悩みの原因である異界に住む鬼を退治する話と分析する。

第二章「瓜子姫とあまんじゃく」。美を象徴する瓜の名をもつ姫を殺して自分が姫になります天邪鬼の昔話は、朝廷や有力氏族の妻妾の座をめぐる熾烈な葛藤を背景にしたものという。

第三章「一寸法師」。一寸法師を人生において出会うさまざまな裏切りや奸計を乗り越えて成長する男子（成人儀礼）ととらえる一方、針をもって家を出て鬼退治する姿は、針術によって病氣

を治す術師として立身したことを意味すると解する。

第四章「舌切り雀」。雀がお礼に置いていったヒサゴの呪力と薬効を解くなかで、ヒサゴをもたらした雀を渡来人とみて、土着民との摩擦を物語の背後にみる。

第五章「カチカチ山」。農作業に害を与える狸をこらしめ、最後に泥舟によって溺死させる鬼の話の背後に、海上の道のさまざまな民族の風習や思想の存在をみる。

第六章「猿蟹合戦」。蟹と柿を同時に食べれば腹痛を起すという古医書の記述から、猿が投げつけた柿によって蟹が瀕死の大怪我をするという物語の設定に、この食合わせの理論が下敷となっているとみる。

第七章「花咲爺」。魂の浄化と洗剤・薬としての効能、とくに美肌・若返りに効くとされる灰が枯木に花を咲かせるといふ行為の意味を支えているという。

第八章「瘤取り爺」。瘤の治療に古くは昆布が用いられていたこと、また鬼の前で踊る爺の姿は、神霊や怨霊を慰撫するために歌舞音曲を奉納した御神楽に該当する行為であるとする。

第九章「浦島太郎」。同話は文化や風習を異にする異種婚姻譚のひとつであり、神女が浦島に示したものは房内・回春術、そして別れに渡した玉手箱は秘方を納めた薬箱とみる。

第十章「かぐや姫」。『万葉集』の竹取の翁の後日譚として描かれたとみる著者は、薬方を知る渡来乙女が老人をからかった罪を詫げるために竹の薬効を伝えたものとする。

問題が多岐にわたる上に、引用文献が日本・中国・インド・ギ

リシア・ローマ・北欧の神話・聖典、さらにはグリム童話や日本の唱歌、古代から近世に至る歌謡・説話・物語・草紙、そして現代のテレビドラマにまで及んでおり、それらを縦横無尽に駆使した論証に驚く。しかし、時間性を超越した筆の運びにはいささか困惑する部分もあった。今回は評者の関心の赴くところを拾いあげるだけに終ってしまい、『医心方』の魅力にとりつかれ、伝達しようとする性急な思いを抱く著者の真意を十分に紹介できなかった非礼をお詫び申し上げる。

(新村 拓)

〔東京書籍刊 一九八九年 四六判 二七四頁 定価一、八〇〇円〕

吉岡信著『近世日本薬業史研究』

著者は東京薬専（現東京薬料大学）を卒業後、東京教育大学（現筑波大学）哲学科を卒業、のち同大学倫理学研究室でヨーロッパ思想史を研究、以来、クスリと哲学（思想）の相互関連・薬学概論、薬史学を中心に研究を続けている。かたわら家業の漢方薬局を経営し、さらに東邦大学薬学部講師も務めている（著者略歴紹介より）。本書は、このような多彩な著者の経歴を反映した大著である。

著者は、あとがきで「もともと薬学がニガ手であった。薬学とは何かの片鱗もつかめないままに薬学を卒えて、哲学に入ってしまった。一刻も早く薬学の枠から逃げ出して、薬学から解放され

たいという気持ちでホッネだった。しかし結果は逆であった。薬学生時代の頃よりも真剣に「薬学とは？」と考え始めてしまった」と述べている。このような著者が薬学・薬業を新たな眼で洞察し書かれた本書は、従来の薬業史とは異なって薬学とは何か、薬業とは何かを、歴史の流れをふまえて教えてくれる。そして薬学・薬業のこれからのあり方も示唆している。

本書は序論、第一部、第二部、結び、付表で構成される。
序論 薬学のパラダイムをさぐる—近世ヨーロッパ薬学の周

辺—

第一部 江戸—ヨーロッパ薬学移植の前夜—

第二部 明治—ヨーロッパ薬学の移植—

結び ヨーロッパ薬学受容の問題点—薬学・薬業の二重構造—

付表 江戸売薬

本書の特徴の一つとして引用文献が多数明記されていることがあげられる。たとえば第一部第一章では一〇四、第二章で二二三、第三章で九六である。第二部では全三章で二八三項もある。付表の「江戸売薬」では七〇余の文献から各売薬の処方、効能、業者名、文献名など拾って記載されている。したがって文献的価値といった面でも高く評価されよう。

全文に眼を通すというより、関心のある項目について本書をひもとく……といった利用法が各分野の研究者によって広く行われることであろう。たとえば「江戸の薬業（その一）『きぐすりや』」では、きぐすりやははじまり、主なくすり行商、幕府の製薬奨

励、武家の売薬業、家訓と家業、家伝薬、毒薬・賈薬取締、きぐすりやと看板など五〇余の項目があり、それぞれ文献をもとに記述し、考察を加えており興味深いものがある。

笠原鉦太郎編著『大日本薬業史稿』（昭和三十七年）、池田松五郎著『日本薬業史』（昭和四年）、清水藤太郎著『日本薬学史』（昭和二十四年）以来ともいえる四〇年ぶりの薬業史に深い敬意を表するものである。

（青木 允夫）

〔薬事日報社 一九八九年 B 五変形刊 五〇五頁〕

付表 五九頁 定価一八、〇〇〇円〕

阿部克己監修、清水勝嘉著

『日本公衆衛生史〈昭和前期編〉』

日本の公衆衛生通史としては、田波幸男著『公衆衛生の発達』（日本公衆衛生協会刊、一九六六年）と清水勝嘉著『続公衆衛生の発達』（日本公衆衛生協会刊、一九八三年）がある。前者は明治から大正期の通史、後者は主として一五年戦争下と占領下の公衆衛生行政を記述している。

本書は一九二六（大正十五、昭和元）年から一九四五（昭和二十）年までを取り上げている。つまり一五年戦争下の公衆衛生史ということになる。

明治開国以来、コレラなどの急性伝染病が外来して、衛生行政

の主流は「防疫」だった。

大正時代には外来の伝染病に加えて、腸チフス、赤痢・疫痢などの予防が重大問題になっていた。そこで本書の第一章は「急性伝染病対策」で、一五年戦争下ではコレラ、痘瘡、発疹チフスなどは外地引き上げ者の間でも大問題になった。

結核などの「慢性伝染病対策」は第二章でまとめられている。この章には結核とらい予防が含まれる。日本人の第一位の死亡原因が結核で、国民病であった時代だった。そこで農村の結核対策も取り上げている。ただし、重大問題になっていた工場結核は第一章の「労働衛生」で簡単にまとめられているので、第二章には入っていない。

第三章は「性病予防」、第四章は「トラホーム予防」、第五章は「寄生虫病予防」である。戦後、各地に寄生虫予防協会ができて、健診活動を活発に実施、この協会が、予防医学協会などに発展し、寄生虫健診よりは、地域や職域の健診機関として発展するのである。

本書の昭和時代には、衛生行政の中心として、防疫からしだいに結核予防、母子保健、国民栄養などと戦争遂行と関連して行政の比重が移ってることが記されている。

そこで、第六章が「農村保健」、第七章が「母子保健」、第八章では「精神衛生」を取り上げている。精神衛生といっているのは、当時はおっぱら精神病対策だったのである。

第九章は「国民栄養問題」。戦時下そして戦後しばらく、全国民が低栄養に悩み、その間、非科学的とさえいえる対策がとられ

た。ただ、本書では一九三五、三六（昭和十、十一）年の倉敷労働科学研究所の国民栄養調査や、労働科学研究所の戦時下の工場栄養調査、一九四二、四三（昭和十七、十八）年の厚生科学研究所の国民栄養調査にはふれていない。

第十章「環境衛生」、第十一章「労働衛生」、第十二章「救護法」以下第二十二章の「軍陣衛生的記事」まできわめて広範な当時の厚生関係の諸行政がとりまとめられている。

著者もいのように、今後、これらの各論をまとめてもらう必要がありそうである。

著者は防衛医大公衆衛生学教室に属し、近現代公衆衛生史専攻の医史学者である。

〔不二出版 一九八九年 B五判 四八〇頁 定価一五、〇〇〇円〕
(三浦 豊彦)

松田邦夫著『万病回春解説』

『万病回春』は、中国明代に龔廷賢によって著わされた医書であり、中国でも本邦においても実地臨床上非常に良く使われた書物である。

一五八九年に初版が刊行され、まもなく本邦へも入り、数年のうちには本邦でも刊行され、版を重ねている。当時としては、異例の速さであり、本邦でも数年後に再版されたという。このことだけでも利用のされかたの大きさが理解できよう。さらに当時の日

本漢方の指導的立場にあった曲直瀬玄朔の『医療衆方規矩』に収載されている処方を見ると、『万病回春』の処方が多く取り上げられ、処方の使用目標の指示も共通しているものが多い。江戸時代にもっともよく読まれた原典は『万病回春』であったといわれ、また医師のハンドブックとして『医療衆方規矩』が使われていたことを考えると、『万病回春』の影響は計り知れないものがある。

現在臨床に用いられている処方の中でも、『傷寒論』『金匱要略』を除けば、『万病回春』を出典とする処方をもっとも多い。また十全大補湯などのように『和剂局方』などが出典の処方でも、『万病回春』の処方運用の指示によった使い方が現在多くなされていることを見ても、『万病回春』の日本漢方に占める位置の大きさが知られる。

先に述べたように『万病回春』の日本漢方に与えた影響の大きさに比べ、現在まで十分な解説書がなかったのは、驚くべきことではあったが、本書を見るとこの書の解説がいかにかたいへんな作業であるかが知られ、いままで解説書のなかったことが理解できるほどである。

さて本書は、故大塚敬節先生から松田邦夫先生に『万病回春』の研究をするようにという指示が実を結んだものとのことであるが、頭注、補注を見ると、一つ一つがよく調べられたものであり、引用も出典が記載されており、後学の者に非常に有用である。

江戸時代にはもっともよく使われた書物が、読解困難なために

顧みられなくなっていたのは残念なかりであったが、本書の上梓により研究が進められることになると期待できよう。

(杵瀧 彰)

〔創元社 一九八九年 A五判 一〇七〇頁 定価一三、〇〇〇円〕

F・ジャコブ著 辻由美訳

『内なる肖像——生物学者のオデッセイア——』

著者ジャコブ (François Jacob, 1920—) は一九六五年に「酵素作用の遺伝的調節機構に関する諸発見」により、ルウォフ (André Lwoff, 1902—) とキノ (Jacques Lucien Monod, 1910—76) とともに、ノーベル医学・生理学賞を受賞した。

本書は、幼年時代から、彼等三人の共著論文「タンパク質合成における遺伝的制御機構」という論文を『分子生物学雑誌』に投稿した一九六〇年のクリスマス・イブに至るまでの自伝である。たんなるサクセス・ストーリーではない。ジャコブは、フランスのユダヤ人家庭に生まれた。一九三八年パリ大学医学部に入学。四〇年、自由フランス軍に志願、アフリカで従軍生活を送り、ノルマンディ作戦で重傷を負って、一年間病院生活を送った。その後パリ大学に戻り、一九四七年卒業した。しかし、確かな目的をとらえられず、転職をくり返した後、生物学者たらんと決心し、パストゥール研究所のルウォフに散々ねばった末、入所することができた。ルウォフ、モノという優れた研究者に出会い、

さらに、「研究所の同僚、研究所外の学者たちとの共同研究、討論によつて成長していった。一九五九年の夏、彼はオペロン説を考へ出した。その後、モノとの共同研究を行い、オペロン説を確かなものにし、一九六〇年の論文となったのである。

本書は、年代ごとに順を追つて書かれてはいない。そして、あとから付け加えることによつて形をととのえたり、筋道をつくつたものではない。自らの奥深いところにあるものをたぐり寄せてできあがつたものである。それが「内なる肖像」なのである。

「内なる肖像」は、現代史の中のジャコブである。そして内省の上に立つた個人史でもある。二〇世紀前半のジャコブは、ユダヤ人としてのジャコブ、フランス人としてのジャコブである。フランス人としてのジャコブがドゴールの自由フランス軍の兵士となつた。

本書の三分の一は、戦後のバストゥール研究所の生活を描く。ルウォフの研究室において、分子生物学が育ち、成熟していく様子、その中のルウォフ、モノの姿も、臨場感をともなつて生き生きと描かれている。生きた分子生物学史である。

本書は、世界的ベスト・セラーとなり、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、オランダ語、スウェーデン語、ギリシア語に翻訳されて刊行されている。そして文学的自伝として評価されている。

最近、『シュレーディングガー』（共同出版）、フランシス・クリック『熱き探求の日々』（TBSブリタニカ）などの分子生物学者の伝記、自伝が目につく。また『分子生物学の夜明け』（東京

化学同人）などの分子生物学史書が出版されている。分子生物学も、歴史として扱われるようになったという感慨をもつものである。

（矢部 一郎）

〔みずす書房 一九八九年 B 六判 四一四頁 定価三、五〇〇円〕

沼田次郎著『洋学』

沼田次郎氏は、ひともしるように、洋学史研究の大先達であるが、今回、日本歴史叢書の一冊として『洋学』を公刊された。本書は、著者がみずから序文の中で述べているように、洋学史の概説を意図したものである。その章別構成をあげると、(一)紅毛學術の伝来と受容、(二)草創期の蘭学、(三)『解体新書』成る、(四)蘭学の発達と普及、(五)転換期の蘭学、(六)出島のオランダ人、(七)、(八)幕末の蘭学、(九)蘭学から洋学へ、(十)要約の一〇章からなる。ほかに洋学史略年表、参考文献、索引が付記されている。次に各章について簡単に紹介する。(一)は通詞蘭学ともよばれる初期の、長崎における西洋學術の移植・研究を説いたもの。(二)は蘭人の江戸参府旅行が蘭学の興起に果たした役割を、新井白石および、八代將軍徳川吉宗の内旨によつて蘭語・蘭学を学習した青木昆陽と野呂元丈について述べたもの。白石と蘭人との對話は四回、青木・野呂の場合にはそれぞれ二〇回および一〇回あげられている。(三)『解体新書』の訳述に始まる本格的蘭学の成立について、まずその社会的背景

として、田沼時代の特質をかなり詳細に説明したのち、オランダ通詞の語学力の向上とこれに伴う訳書の急増を指摘し、この通詞の語学力を学びとった前野良沢が中心となり、『解体新書』の訳述がなつたことを明示する。それとともに、訳述事業の推進者である杉田玄白をはじめとする協力者の名と経歴をあげ、訳述の経過を述べる。そして最後に、『解体新書』の史料的価値を再確認する。(四)では、その後の蘭学の発達について、江戸・京坂における蘭学の発達と普及、さらに長崎におけるそれを、人脈を中心に概観したほか、この時期の蘭学を医学・本草学研究と天文暦学・地理学研究に分類し、前者が専門分化の傾向をみせること、後者は主として幕府の天文方に継承されたことを指摘する。(五)では、化政期にいたって蘭学者の世代交代が行われたこと、とくに馬場貞由の江戸誘致に伴い、蘭文法が伝えられた結果、江戸の蘭学者の語学力が一段と向上したこと、さらに天文方に蛮書和解御用が設けられた結果、蘭学が公学化したこと、これらによって化政期を蘭学史上、一転換期とみなすべきであると説く。(七)および(八)は幕末における幕府および諸藩の西洋軍事知識その他の受容と民間私塾の蘭学を粗描したものである。(九)は英学・仏学およびドイツ学の受容を述べ、さらに人文科学と社会科学の誕生に言及する。(十)は全体を要約しつつ、洋学の歴史的意義について論じたものである。

本書の中には、著者の創見と思われるものがかならずしも乏しくはないが、しかしその本領は、あくまで史実の確定に意を注いだ点にあるといえよう。その意味で、本書は信頼にたたる概説書といえる。ただ難をいえば、幕末の洋学についてはいささか簡略

にすぎ、また洋学の歴史的意義についても、著者が立脚する封建制補強者説だけではなく、これと対立する批判・克服者説についても言及して欲しかった。

(佐藤 昌介)

〔吉川弘文館 一九八九年 四六判 二八二頁 定価二、七〇〇円〕

杉本勲編『近代西洋文明との出会い―黎明期の西南雄藩―』

杉本勲氏を中心とする西南諸藩洋学史研究会は、科研費総合研究「九州雄藩科学技術の研究」のメンバーによるもので、その発足は一九七六年秋からである。主たる研究課題は、西欧科学技術の移植を基軸とする洋学の育成過程を実証的に究明することにあるという。

まず基礎的作業として、関連史料の採訪、収集史料の分析、史料目録および解説を作成し、一九八五年八月に刊行された。これがトヨタ財団助成研究報告書『西南諸藩の洋学―佐賀・鹿児島・萩藩を中心に―』である。次いで一九八七年二月には、佐賀藩主鍋島直正の側近本島藤太夫(松蔭)の同藩軍事改革に関する備忘録を編纂し、史料集『幕末軍事技術の軌跡―佐賀藩史料―松乃落葉―』(杉本勲・酒井泰治・向井晃編著、思文閣出版)が刊行された。また、一九八六年四月、佐賀において「幕末佐賀を探る―新史料に見る幕末洋学の実態と史的意義―」のテーマで研究大会が催された。このときの発表講演の成果を結果集したもののが本書で

ある。

本書は言うまでもなく、前の二著の延長であり、共通の問題意識のもとに、各分野の諸氏十二名による個別の研究論文がおさめられている。本書のねらいは、史料の分析と総合に基づいて、西南洋学史を体系化する点にある。したがって西洋科学・技術、西洋医学、博物学、蘭語学、さらには科学・技術教育、海外情報・文化受容などの諸点から具体例を採り挙げ、体系的に編集されている。これが本書の大きな特徴である。以下に、章、節（著者・論題）を列挙する。

一 序説。杉本勲「幕末洋学における西南雄藩の位置」。

二 佐賀藩における西洋技術の受容。杉谷昭「西欧文明との接触—佐賀藩と観光丸—」、長野暹「在米技術と移入技術の接点—佐賀藩の鉄製大砲製造をめぐる—」、飯田賢一「佐賀藩の技術選択—なぜ熔鋳炉を設けなかったか—」。

三 科学・技術教育の推進。岩松要輔「英学校・致遠館」、羽場俊秀「長崎海軍伝習所と佐賀藩」。

四 西洋医学・博物学・蘭語学の展開。酒井シヅ「佐賀藩の医学」、矢部一郎「鹿児島・佐賀の本草学史料—西洋博物学・農学受容の側面—」、大森實「シーボルトと『かえでの葉』—ライデン国立腊葉館所蔵のタカオカエデの葉の標本集について—」、斎藤信「大庭雪齋の『訳和蘭文語』について」。

五 海外情報・文化受容の諸相。向井晃「海外情報と幕末の九州」、酒井泰治「洋学的観点より見た史料『松乃落葉』—語い、の分析による西欧文化受容の例—」。

全体の「まえがき」は編者杉本勲氏。

総括的にみると、幕末洋学の最先端を邁進していた佐賀藩の洋学を中心に、西南諸藩相互と幕府の動向との比較検討に焦点が合わされている。

先人たちの文化受容の軌跡を描く本書は、洋学史・科学技術史・対外交渉史などの研究において、我々に多くの示唆を与えてくれる書でもある。息の長い研究を続けていらっしやる諸先生方の熱意と努力に敬意を捧げるとともに、次のステップが公開されることを心待ちにしている次第である。

(吉田 厚子)

〔思文閣出版 一九八九年 A五判 三一〇頁 定価四、七三八円〕

科学朝日編『スキャンダルの科学史』

本書は、『科学朝日』に一九八七年から二年にわたって掲載された連載記事「科学者をめぐる事件ノート」の内容をまとめたものである。あとがきに記されているように、新聞でいえば社会面で扱われるようなエピソード（スキャンダル）を掘り起すという企画意図のもとにまとめられたという。本書のタイトルは、「エピソード」から「事件」、そしてよりシヨッキングな「スキャンダル」という言葉が用いられているが、内容的には一篇ごとに特定の科学者の活動をとりあげた科学研究の裏面史的なものが中心となっている。

「事件」という語からくる良くないことという印象から「スキヤンダル」というタイトルが付けられたのかどうかはわからないが、内容は必ずしもスキヤンダルだけとはかぎらない。

取り上げられている事項は、古くは明治初期から、新しいものでは心臓移植事件に至るまで、日本人科学者を中心に二六篇が収められている。

収録されている二六篇のうち医学に関する内容が半数の一三篇ともっとも多いので、そのタイトルを列挙してみる。「飛び交った自殺説(野口英世)」、「幻の脚気菌発見(緒方正規)」、「血液型人間学事始め(古川竹二)」、「伝染病研究所移管事件(北里柴三郎)」、「雌雄鑑別法と男女産み分け論争(増井清)」、「心臓移植事件(和田寿郎)」、「毒ガス中毒事件(小泉親彦)」、「血痕鑑定事件(古畑種基)」、「若返り療法事件(神保三郎)」、「陸軍脚気大量発生事件(森鷗外)」、「文部大臣自決事件(橋田邦彦)」、「ベスト感染事件(青山胤通)」、「医学博士号売買事件(勝矢信司)」。このように、事件と称されている内容は多くその道の専門の学者間の学術上の問題ではなく、本来学術研究上の見解や見通しであったものが、一般社会や行政の中で個人を越えて影響を与えていく過程での混乱であったり、過去において信頼さるべき業績を挙げている学者の見解や研究上の推論が、後に誤りであることが判明したり大幅な修正が行われたような場合、その混乱に対して事件(スキヤンダル)と称されている場合が多い。とくに医学の分野においては、一般の人々にとって都合の良い結果だけが先行し、すぐにでもその恩恵に浴したいという圧力が高まり、もしその結

果が期待したとおりにならない場合には「事件」ということになりかねない。今日でもつねに起り得ることではないだろうか。その他、本書で取り上げられている「事件」には、工学など応用学的分野のものが多し。

執筆者は、常石敬一(四篇) 溝口元(四篇) 中山茂(三篇) 下坂英(二篇) 広田鋼藏(二篇) 他一名であり、内容も単なる三篇記事的スキヤンダルから科学研究史としても意義のあるものでさまざまではあるが、タイトルにひかれて気が向くままに読んで見ると、それなりに現代にも通ずる科学研究のもつもう一つの側面を知らせてくれるような気がする。一読をお勧めする。

(佐藤 達策)

〔朝日新聞社 一九八九年 B六判 三〇〇頁 定価一、九〇〇円〕

柳澤桂子著
『「いのち」とはなにか—生命科学への招待—』

分子生物学、あるいは遺伝子工学ということに興味をもっている人ならば、これまでに何冊かの本を手にしたことと思う。また、時代を背景として必然的に出版されるべくして出版された著書、解説書であっても、その多くはたんに常識的な、基本的な知識を求める読者をとまどわせ、食わずぎらいにしてはいなかったらうか。専門的なジャンルは少々難解であっても許され、理解度は読み手の側の問題とされてきたのではなかったらうか。

しかし、本書を一読して印象深かったのは、平明な文章を駆使し、抵抗感なく読まされる不思議さと、初心者にわかりやすく、しかもかなりの予備知識をもった人にも大きな示唆を与える内容量を含み、要を得て書かれていることだった。当然のことながら、専門的な知識はもとより文献上の深い知識とともに該博な知識が必要とされるが、末梢的な部分にまでそしゃくし、文章化する作業はたいへんな苦勞があったことだろうと思われるが、この分野を過不足なく丁寧に論ずることのできる最適任者の一人であることを知った。

おうおうにして理解させたいという考えが先行し、情報量と専門用語でページを埋めつくしかねない分野にもかかわらず、読ませるリズムをもち、そのつど現われる用語を何気ない日常の言葉で織りこみ、文章の流れを止めることなく読ませる。それは著者が「はじめに」の文中で「私は、生命現象のもつとも基本になることを誰にでもわかるようにしていねいに説いた本を書くことを、長い間夢見てきました。…やさしく説明してもレベルを落さないように気をつけました」と記した考えからも察することができるように、いかに記述するかという根本的な問題を真剣に考えて抜いて書かれている著書といえる。

本書の具体的な構成を見ると、古代から中世に至る生命観を概括的に展望し、背景がさりげなく紹介されている。そして生命現象の基本となるメンデルの法則へと導びき、一九五〇年後半から六〇年はじめの分子生物学の黄金時代。遺伝子工学のめざましい進歩を遂げた現状において、すでに確立された事実をわかりやす

い図を交えながら、一〇章からなる本書は展開されている。多くの研究者の大胆な仮説、思考、そして空想力。そこに漂う知的興奮を見事に伝えながらも、学問的な意義と研究者に対するモラル、反省のあり方をそれとなく示唆する一方、読みすすめる側の間隙をぬうかのように、数行に凝縮されたエピソードなど、ときには推理小説を読み、わくわくする読者のように、あるページではじれたりしながら読まされてしまった。

ややもすると飽きさせそうなテーマだが、こともなげに、しかもきわめて綿密に書き抜かれた本書を手掛かりとして、若い研究者の出現を著者とともに夢見たい。

〔講談社 一九八九年 A五判 二八〇頁 定価一、九八〇円〕
(中沢 滉)

長崎市教育委員会編『シーボルト記念館資料目録(1)』

平成元(一九八九)年十月、長崎市と長崎市教育委員会によってシーボルト記念館が設置、開館された。所在地は長崎市鳴滝二丁目七番四〇号で、国指定史跡「シーボルト宅跡」の隣接地であり、シーボルトが開いた鳴滝塾の敷地の一部である。建物の外観は、オランダのライデンにあるシーボルト旧宅を模したものであり、玄関はシーボルトが幼年時代に過した叔父ロジジ宅をイメージ化したものである。記念館の収蔵資料は約一、五〇〇点で、うち重要文化財四四点、国認定重要美術品九点が含まれる。常設展

示場、企画展示場があり、毎週月曜日、十二月二十九日～一月三日の休館日をのぞいて、九時から一七時まで（入館は一六時三〇分まで）開館している。年に数回特別展を開催することになっている。入館料は、一般が一〇〇円である。

本資料目録は、平成元年九月現在収蔵されている一、五〇〇点のうち、整理が終了した約一、〇〇〇点を収録したものである。今後、残り五〇〇点とその後収集する資料を合わせた『資料目録(2)』が予定されている。

記念館の収蔵資料は、一般収蔵資料のほか、寄贈資料からなる。楠本文庫(1)、楠本文庫(2)、米山文庫、中山文庫、楢林文庫、山吉文庫である。楠本文庫(1)は、楠本チエ寄贈資料（市立博物館より引継）、楠本文庫(2)は楠本八代子寄贈資料、米山文庫は米山種寄贈資料（市立博物館より引継）で、シーボルトの子孫楠本家の関係資料である。

中山文庫は中山知雄寄贈資料で、阿蘭陀通詞中山家関係資料である。楢林文庫は楢林寿一寄贈資料（市立博物館より引継）で楢林建吉、同篤三の関係資料、山吉文庫はシーボルトの門人森田千庵の関係資料である。

記念館収蔵資料は、シーボルトの子孫、門人その他の子孫の方々の協力により、全国各地から収集したもので、その中心はシーボルト関係資料であるが、中には、シーボルトと直接関係がないものも含まれている。しかし、長崎、洋学、蘭学にかかわる貴重な資料であることはいうまでもない。

本資料目録は、文書資料、地図・絵図資料、写真資料、器物資

料、洋書に分けて、さらに、各種文庫別、さらに分野別に分類して記載されている。それぞれ、必要十分な記載がなされており、学問的に十分評価され得るものであり、利用者に十分資する形式をととのえている。また、「常設展示場展示一覧表」、「シーボルト記念館の概要」、「シーボルト記念館建設の経緯」などの記事がある。

長崎でのシーボルト関係資料は、県立博物館、県立図書館、市立博物館、長崎大学経済学部武藤文庫などにあるが、今回、シーボルト記念館が加わった。本目録の請求や本記念館への問合せは、前記住所の記念館（電話〇九五八一―二三―〇七〇七）あてにされたい。

本目録には、彩色写真グラビア四頁、白黒写真グラビア一〇頁があり、利用者にとってはありがたい。

〔シーボルト記念館 一九八九年 B五判 八六頁 非売品〕
(矢部 一郎)

孫思邈著『千金方』四種、附研究資料集

唐・孫思邈著『千金方』は日中両国を通じて医学史上きわめて重要な意義を持つ医学書である。

現在流布している『千金方』は嘉永二年、江戸医学館の多紀氏等が米沢藩上杉家に秘蔵される宋版『備急千金要方』を校勘補正して復刻出版したものの影印本である。

江戸医学館による補正はかなり広範囲にわたっているので同書は忠実な宋版の模刻とはいいがたい。それゆえ『千金方』の研究にあたってはどうしても原本を閲覧する必要があった。ところが本書は昭和五十一年、国に買いあげられ、重要文化財に指定されて文化庁の管理下に置かれたため、閲覧はいっそう困難となった。

宋版『備急千金要方』は宋代に林億等儒臣の手によって、原図『千金方』に大改訂が加えられて成ったもので、著者孫思邈の旧態を著しく損じたものであることは古鈔本『千金方』一卷（宮内庁書陵部蔵）ならびに南宋刊『新雕孫真人千金方』（静嘉堂文庫蔵）の発見によって決定的に明らかとなった。

この両書が宋代改訂以前の体式を備えたものであることは、研究資料集のなかで小曾戸氏がカラホト発掘の資料も加えて詳しく立証されている。

古鈔本『千金方』は天保三年、松本幸彦によって模刻影印された『眞本千金方』と題して出版された。本書は古鈔本の忠実な模刻であるが朱印・朱文・朱点は写していない。このたび刊行された古鈔本『千金方』は宮内庁書陵部蔵書の影印であるから、両書と比較してみると、これにあって天保版にない部分は朱の書き入れであることがわかる。

『新雕孫真人千金方』は清・陸心源の所蔵であったが陸氏の没後、明治四十年に岩崎氏が購入して静嘉堂文庫に納めたものである。本書は全三〇巻のうち二〇巻が残存し、亡佚した一〇巻は元・明の刊本で補填されている。残欠とはいえ三分の二を占める

原版は宋改以前の旧態をしのばせるに足る。

『千金翼方』は、孫思邈が『千金方』の不備を補う目的で選したもので、現存する最古の刊本は本叢書所収の元・大徳十一年（一一三〇七）梅溪書院刊本である。本書は多紀氏津修堂から内閣文庫を経て宮内庁書陵部に収蔵された。

『千金方』の研究にあたり、宋版『備急千金要方』、古鈔本『千金方』、宋版『新雕孫真人千金方』、元版『千金翼方』の四書は基本となる重要な資料であるが、いずれも秘府に宝蔵され、閲覧は不可能に近く、この方面の研究を困難にした大きな原因の一つとなっていた。

このたびオリエント出版社からこの四書が揃って影印出版されたことは、この障害を完全に払拭するもので、研究者にとっては夢のような福音である。

叢書には別冊として『千金方研究資料集』が附され、江戸期から現在に至る有名な考証学者の重要な研究業績がことごとく網羅され、そのうえ巻末には詳細な索引と対経表が載り、研究者にとってこのうえない指標となっている。

原刊の影印と研究資料と相まって、本叢書は大きな価値のある出版として永く後世に銘記されるであらう。

（戸出 一郎）

〔オリエント出版社 一九八九年 B五判 影印四、八〇九頁・

資料集四九三頁 定価一七八、〇〇〇円〕

中世期のイスラム医学が古代ギリシア医学を西欧近世世界へと橋渡しする役割を果たし、近代の西欧医学誕生の原動力となったことは医学史の常識に属すことかもしれない。しかし数世紀に及ぶイスラム医学の歴史が、ギリシア医学のうえにどの様な独自の思想や見解を刻みつけたのかということになると、西欧の医学史家によってさえ十分な研究がなされていないというのが実状であらう。

本書はこうした医学史上の疑問に本質的な部分で答を見いだすことのできる数少ない文献のひとつであると言えよう。

著者によるとイスラム医学の独自性は、古くからオリエント一帯に育まれてきた絶妙なバランス感覚にあり、この感覚こそイスラム医学に、伝統的なギリシア医学のうちには見られなかった動機かつ統合的な観点を可能にしたものである。たとえば身体の各器官の解剖学的な分類、熱冷乾湿といった身体諸元素の基本性質、四体液説などのギリシア的な医学理論に加えて、イスラムの医学には、それらの部分やその性質や理論など、およそ身体の諸要素、諸機能間の役割の分化を超えた全体的調整機能が考えられているという。

本書はこうしたイスラム医学の調和的構造を完成させた医学者として、イスラム世界第一の知性者で『医学典範』の著者としても広くその名を知られたイブン・スィーナー（ラテン名はアビセ

ンナ）を取り上げ、その医学体系を支えている基本的な思想とその特徴とを明らかにしようとしている。

身体諸器官の調和についてのイブン・スィーナーの観点には、たとえば、「医者たちが主題として扱う平衡」とは、等量の均衡状態から生ずる平衡なのではなくて、身体各部分同士における配分的平衡状態であり、それが生じれば身体に調和を与えるようなものである」という論述にも見られるように、分析的視点からは捉えられない生体に対する多次的理解が土台となっている。著者はさらにその理解の背後には、イスラム中世に独自の宇宙論的調和の形而上学が横たわっていることを指摘し、この「医と知」との連続的視点を、いわば反対方向から、つまり『治療の書』というあたかも医学書のごとき題名をもったイブン・スィーナーの形而上学に関する著作から辿ることによって、その連続性を一層明確にしようとする。

読者は著者の手で解明される中世期イスラム医学の背後にあるあまりに広範な「知の連鎖」に戸惑いを感じることもあるかも知れない。しかしわれわれは本書によって、医学がある意味では宇宙の謎や神秘を映し出す人間身体という特異な存在を対象とするものであることをあらためて想い起こし、近代医学が唯一の医学モデルでないことにも否応なく気づかせられることになる。

(石渡 隆司)

〔講談社 B五判、二九四頁 定価二、九〇〇円〕

岩崎龍郎著

『日本の結核—流行の歴史と対策の変遷—』

この本は「わが国の結核流行の歴史」と「わが国の結核対策の歴史」の二部から構成されており、第二部は「結核病学進歩の歴史」としてもよい内容である。A五判・八三頁のこの本に、すべての資料を網羅した年代史的記述は望むべくもないが、基礎医学から行政にまで及ぶ著者の深い学識と広い視野によって、簡にして要を得た日本における結核の流行と対策の全体像が提供されている。

著者は、研究者としての経歴を病理解剖学者としてスタートし、岡治道らによる我が国独自の結核発病理論である「初感染学説」の確立・発展に貢献し、さらに化学療法の効果判定や予後予測に有用な肺結核分類体系を作りあげた。のちに結核予防会の指導者として我が国の結核対策推進の中枢的役割をはたしつつ、WHOなどとの協力の下に発展途上国の結核対策にも重要な役割を演じている。著者には、ドイツ医学の影響の強い病理解剖学者にややもするとみられる思弁哲学風の偏向はみられない。病理学の実験から得られた顕微鏡下に観察できる像のみを信じるという古い意味での実証主義と、実際に結核対策推進の中枢に参画してきた当時者性とは、この本の項目設定、資料の取捨選択、その解釈に色濃く滲みでていて、文献調査のみからは得られない臨場感をこの本に与えている。

著者自身はふれていないが、この本は同じ著者の前著『結核の自然史—個として群として』の各論または日本への応用篇として読まれるべきであろう。前著で著者は、結核という病気が一人の人間において感染から始まって治癒ないし死に終る一つの自然史的な過程であるとともに、一つの国・地域における民族と結核とのかわりあいがあるが、これまで一つの自然史的な過程であり、流行の発端から最盛期を経て終息に至るその過程は、それぞれの民族の自然環境・地理的条件・経済的政治的諸条件・社会人類学的諸要因などによって規定され、そのときどきの科学・技術、特殊には結核病学の進歩や結核医療制度、対策などによって影響されながらも、大筋としてはそれ自体の自然史的過程を貫徹していくという思想を、十分な説得力をもって展開している。『日本の結核』はこの思想の文脈のうえに立って読まれるべきであろう。

結核が日本において過去の病気となったがために「歴史」が書かれたのではない。経済大国を誇りながら、こと結核に関しては欧米諸国に二〇〜三〇年の遅れがあり、当分この格差は埋まりそうもない。「日本特有の自然史」を迎える「日本の結核」にどのように対処して「日本の結核」の根絶を目指すのか？ この本は著者からの鋭い問題提起の書でもある。

(兼松 一郎)

〔財団法人結核予防会 平成元年 A五判 八三頁〕

定価一、八六〇円

ルイス・ハーバー著、石館三枝子・中野恭子訳

『二〇世紀の女性科学者たち—その展開と可能性—』

本書は二〇世紀において科学の分野で活躍した一二人の女性科学者の、いわば列伝である。著者のルイス・ハーバーは、生物学・化学・物理学を専門とする研究者であるが、彼女は、まえがきにおいて本書を執筆した動機を記している。それはひと言でいえば、女性科学者はマリイ・キュリーだけではない、ということである。科学分野でノーベル賞を授賞した女性は本書が執筆された一九七九年までに六人を数えていた。しかし当時は、彼女らを含め、科学の進歩・発展におおいに貢献した女性について、その貢献が学校で教えられることもなく見過ごされてきたのである。著者によって紹介された一二人の女性科学者の活動は、このような状況と、その原因であった社会全体の女性に対する偏見を、みごとに打ち砕くものであった。

一二人の名前を以下に記してみよう。アリス・ハミルトン、フロレンス・リーナ・セイビン、リーゼ・マイトナー、リータ・S・ホリングワース、レイチェル・フラー・ブラウン、グラディウス・アンダーソン・エマーソン、マリア・ゲッペルト・マイヤー、マイラ・アデル・ローガン、ドロシー・クロウフット・ホジキン、ジェーン・C・ライト、ロザリン・S・ヤロウ、シルビア・アール・ミード。彼女らの名前は、専門家以外には、あまり知られていないのではないだろうか。しかし、その業績は、著

者が記したように、文字通り科学の進歩そのものなのである。

彼女らの足跡は、当然のことながら、女性であるがゆえに生じる障害によって、決して平坦なものではなかった。一九世紀末に医学を志したアリス・ハミルトンは医学部への入学、学生時代、さらには医学士となってからの研修においても、男性と同じ機会を与えられず様々な困難を体験した。またフロレンス・セイビンも、女性という理由で、大学の主任教授の地位を得られないなどの不合理に直面した。しかし時代の流れは、確実に変化した。一九六七年、ジェーン・C・ライトは黒人女性として初めてニューヨーク医科大学の副学長の地位に就いている。

以上のように本書を紹介すると、あたかも女性差別に対する、女性科学者の艱難刻苦の物語のように思われるかもしれない。しかし、本書の魅力は、むしろ彼女らを科学史上に的確に、しかも一般読者にもわかりやすく位置づけようとする著者の姿勢に求められるであろう。このような内容は、専門家には物足りない点もあるかもしれないが、章ごとに取り上げられた科学者を中心とした科学史の簡単な解説にもなっているのである。

はじめに述べたように、本書がアメリカで出版されたのは、約一〇年前である。この間女性の職業に対する認識は、さらに大きく変化した。社会の様々な面で「女性」という修飾なしで、その業績が評価される時代になりつつあり、冒頭に記された執筆の動機は、今ではいささか古くさく感じられる。しかし個々の科学者の生き方は、まさに現代女性の良きロール・モデルとなるであろう。

〔晶文社 一九八九年 四六判 一九七頁 定価一、六二〇円〕 (三崎 裕子)

王丸勇著『史学と病跡学夜ばなし』

日本医史学会の名誉会員であられる王丸勇博士が著書『史学と病跡学夜ばなし』をご出版されました。小生は平成元年十二月十日の西日本新聞の新刊記事紹介ではじめて知ったのであります。その後、日本医史学会事務局より、書籍紹介のお願いがありましたので失礼とは思いましたが筆をとらせていただきました。

西日本新聞の新刊記事によると「筆者は久留米大学医学部名誉教授で日本病跡学会理事長。趣味とする日本史涉猟と医学専門分野からの随想集だが、軽い夜ばなしというより理路整然と論文めいて八十八歳の探求心と健筆ぶりに驚かされる。第一話『白楽天と菅原道真』では二人の経歴、作品など詳細な比較から前者は社交家で人生を楽しんだ循環気質圏、後者は孤独で敏感、内省心と向上心の強い分裂気質圏の詩人とする。：』という書評でした。

ご執筆内容は三項目よりなり、主として全国の歴史上の人物が多いが、一部に年中行事、民俗学的考察や近代の戦争もあり、福岡地方の医史学を探索する小生には、福岡地方の歴史上の人物である菅原道真、米一丸と石童丸、人參晶の女医の三項目は貴重な郷土史料であります。その中の人參晶の女医とは、福岡で幕末の眼科女医高場たかま乱のこと。結婚歴はあるが生涯男装で押し通し、

頭髮を茶せんに結び甚笠をかぶり、帯刀し、馬にまたがった往診姿でありましたので「人參晶の茶せんばあさん」の愛称で呼ばれていた。人參晶とは博多の薬草学者内海蘭溪が藩の経営のもとに高麗人參の栽培をしていたところ。ただし廢藩後、人參晶は荒廢し、晶の中の番小屋に高場乱は移り住み、血氣盛んな青年を集めて自由民権を提唱する政治結社を育てる目的で塾を開いたのが明治六年頃と思われ、「興志塾」から「向陽塾」と名称も改められ、「玄洋社」に発展したのである。高場乱は亀井南冥の流れをくむ亀井塾で教育されたので、その精神は塾生に受けつがれ、頭山満・平岡浩太郎を生んだ。玄洋社には、大隈重信に爆弾を投じて自決した来島恒喜、東條英機と対決して自決した中野正剛、廣田弘毅元首相、緒方竹虎副総理ら日本の大物政治家が輩出した。王丸博士は専門の精神神経学者としての立場から、歴史上の人物をその人の行動、手紙の内容、筆蹟など、あらゆる方向からみて、その人物の性格を診断されておられることは、歴史を学ぶ者にとっては興味深い本であります。

(奥村 武)

〔牧野出版 一九八九年 B 六判 二〇七頁 定価一、五〇〇円〕

長谷川つとむ著

『東京帝大医学部総理 池田謙齋伝』

まず最初にお断りしておかなければならないのは、本書は池田

謙齋を主人公にした小説である、ということである。

われわれにとつてはともかく、一般の読書人には池田謙齋という人物は耳なれた名ではなからう。おそらく著者もその辺の事情は心得ているとみえて、本書の標題もただ人名だけでなく、肩書を付すことをわすれていない。それもわが国でもっとも難関の大学のひとつである東大の名を冠することによって、謙齋をクロージャーアップしようとしている。

池田謙齋の生涯において、この人にもっともふさわしい肩書をただひとつだけ付すとすれば、医学部総理（本書のように普通は総理とされる）であるが、医学部の場合は「総理」、東京大学全体の場合は「総理」とするのが正しい。よりも、明治天皇の侍医としての活躍から侍医局長官が一番適切であろう。それをあえて、さきのような肩書を付したところに著者の意向の一端をかいまみることが出来る。しかし謙齋が東大医学部の校長あるいは総理であったのは、明治十年一月から明治十四年六月までの約四年半であり、この頃の学校の名称は「東京医学学校」あるいは「東京大学医学部」であって、「東京帝大」ではなかった（帝国大学を名乗るのは明治十九年、東京帝国大学は明治三〇年からである）。だから本書の題名は、謙齋をいかにアピールするかの苦心の現れともいえる。

著者はもともとドイツ文学者である。西独政府給費生としてキール大学に留学して、ドイツのファウスト学の最高権威であるトルント教授についてゲーテ、なかんずくファウストを研究した学究で、現在日本大学教授（法学部）としてドイツ文学を講じて

いる。本業のファウストの研究によって、一九六九年には日本ゲーテ協会賞を受賞しているが、そのほかに余技としての作家活動によって、日本文芸大賞や日本ノンフィクション賞を受けている。日本ペンクラブ会員、日本旅行作家協会会員でもある。近ごろ『手塚治虫氏に関する八つの誤解』（柏書房）を出版しており、なかなか活動範囲のひろい人物である。

日独文化交流史の観点から、官費留学生第一号である池田謙齋の「開明度の高さ」と広さ、その即応性、封建の時代に生を享けながらデモクラティックな感情を宿していたこと」に感銘を受けた著者は、謙齋の魅力にとりつかれてひろく資料を収集して、まず学術論文を日独文化交流史の学会や、『日本大学紀要』に発表した。この謙齋熱は、謙齋病と変り、ついに病膏盲に入って、謙齋の魅力を多くの人々に知ってもらうには小説の形をとるほかないと思ふにいたったという。

池田文書研究会の一員として、池田謙齋なる人物に少なからぬ興味をいだいている私は、はたして謙齋がいかなる思想を有し、医師としていかなる活動をしたかを明らかにしてくれるにちがいない、との期待でページを追ってみた。この予想にたがわず、謙齋の人物像がかなり鮮明にえがかれている。ただ本書が小説であるので、どこまでが史実であり、どこが著者のフィクションであるか、私にはそれを的確に判別する力量もないし、その資料（あるドイツへの懸橋―池田謙齋研究『桜文論叢』二〇巻、昭和六十一年）を一読しても、仕分けすることはなかなか困難である。医史学の立場からは、この点をしっかりふまえて読みこなしてい

かなければならないであろう。

採用した史料名を具体的にあげて、事実の裏付けにしている部分がある反面、おそらくもっともおおきな依り所にしたと考えられる謙斎の『回顧録』(一九一七)や、『池田謙斎 プロイセン国ベルリン 一八七〇〜一八七三』(彩雲堂、一九八四)が史料としてかかげられていないという不揃いが目につく。史料を逐一あげていけばうとうしいし、史料をまったく無視しては成り立たない、というのが歴史小説の泣き所であろう。われわれとしては、巻末にでも典拠した史料をあげてほしかったとのぞむのは、無い物ねだりであろうか。

一読して「医学部総理」としての謙斎が、その地位にあつてどのような業績をあげたのか、彷彿として眼前にうかびあがつてこない恨みがある。これはかならずしも著者の責任ではなく、謙斎自身が初期の医学部を建設、整備した以外にこれといった業績をあげていないのだから、それをのぞむのは酷というべきだろう。

世上あまり知られていない池田謙斎なる人物をとりあげて、わが国の近代医学教育の先駆的役割をはたした実績を、非常に読みやすく、生き生きとした筆致でえがいている。著者のその筆力には、あらためて敬意を表したい。

(深瀬 泰且)

〔新人物往来社 一九八九年 四六判 二五三頁〕

定価二、二〇〇円〕

高橋理明著『ワクチン今昔物語』

本書は、黎明期のワクチンについては既刊の成書に譲り、分子生物学台頭以後、急速に進歩したワクチンについて主として述べた「ワクチン現代史」ともいうべきものである、一般向けにウィルスワクチンを中心に、平易に纏めた好著である。昔時の部分を簡潔に記述し、しかも今昔の間に空白をつくらず淀みなく現代の先端的研究、その問題点(第三〜六章)へと連繋し、しかも興味を持たせつつ解説した点は、著者がかつとも苦心されたところではなからうか。

ワクチンの背景をなす基礎学の進歩(第三章バイオテクノロジー1、第五章免疫ほか)に言及し、ワクチンの理解に役立っているが、一般読者のために、遺伝子組換えについてはもう少し詳しく解説を補った方がよかつたと思われる。

全巻を通じ「既成の概念に捕われることなく」との主張が見られるのは、さすが長年の間、ワクチンの開発、製造、実地応用に取組んで来られた著者ならではの卓見である。しかし、たとえば二三頁で、旧百日咳ワクチンではこれまでK抗原が必須抗原とされてきたが、今日ではHAや毒素免疫が重要であると述べ、続く文脈からあたかも百日咳ワクチンが完成されたとき印象を読者に与えている。しかし、最近になり、百日咳の場合には毒素免疫では保菌者を残す等の問題もあり、いわゆるK抗原(69K蛋白。抗原因子がフィムブリン抗原)が重要な防御抗原として再び直

されつつあること (Shahin, et al. 1990 ほか) を考えると、ワクチンは、既成の概念の上に新見が相込込まれつつ改良されてゆくものであることを述べられた方がよかつたのではと愚考する。

また、史的記述であるから、各所に年代が付されており、その発展経過を知る上で役立つ。しかし、第二章以後にはほとんど年代の記載がないが、合成ペプチドワクチン (六八頁) でさえ、パストゥール研究所での発想以来すでに三〇年近くたつ。一〇年ひと昔と普通にいうが、ワクチンの場合には約五年刻みで年代を挿入して置いていただけたらと思う。

ワクチン発達過程で、その有効性や副作用がどのように改善されたかを、具体的数字で示されたのはたいへん理解し易い (二六頁、三六頁)。しかし、随所に「きわめて少ない」、「効果も良好」(五三、五八、六一頁ほか) などと一般読者の想像にその判断を任かせているのは親切でない。五三頁に「占部株は臨床反応はきわめて少なく」と記しているが、国の指定株を用いて製造した三種混合ワクチン (麻疹 AIK-C 株、風疹 TO-336 株、ムンプス占部株) の副作用が社会問題となったことでもあり、やはり占部株の副作用について数字をあげて説明して置いた方が一般読者にはわかり易い。

興行きの深いワクチン学を、限られた頁数にまとめることは至難のことで、したがって割愛された箇所も多かったと思われるのに妄言を述べて申し訳ない。

なお、参考文献には、もっとあげてもよいものがあるように思われる。

最後に、良書の瑕瑾をあげつらうようで、まことに申し訳ないが、読者のために付け加えさせていただと、iii 頁にモンターゲンとあるが、『岩波西洋人名辞典』には「Montague モンタギュー」とあり、お確かめ願いたいし、一頁フィリップスはフィリップス (Phipps)、二頁モイニッケ、病苗はそれぞれモーニケ (Mohnike)、痘苗、三頁痘菌は痘苗、六頁ジヨセフはジヨセフ、二八頁 Guerin は Guerin ではなかるうか。

〔共立出版 一九八九年 四六判 一二四頁 定価一、三六〇円〕 (添川 正夫)

山本徳子著『医学史ものがたり』

今回、日本医史学会で活躍されている、山本徳子助教授が標記の書を上梓された。

同じ中国医学史に興味をもっている一人として、書評を求められたと思うので、読書感といったものを簡単に述べさせていただいて、その責を果したいとおもう。

七〇〇円あまり、六〇頁という小振りながら、その内容は先生の日頃の御研究内容が凝縮しているようである。

その序言で、本書が『メディカル・コンパニオン』という、医学生を主に対象とした離誌に掲載されていたものを、ひとつにまとめたものだという。それゆえか、平易で親しみやすい筆で書かれている。

『医学史物語』東洋篇という目次になっているぐらい、全九篇のうち六篇までは中国医学について、あとの三篇は我が国の古い医制について記されている。

先生は医制の研究をテーマのひとつとされているから、全篇の内容はそれに比重がかかっている。

第一篇、「医師のはじまり」では、『大唐六典』等からの医学制度、医学教育制度をうき上らせている。

二～四篇は、中国のことわざを通じての医者像であるが、たとえばよくいわれる「肘三折」の解説には耳を傾けるべきだろう。その他、「医三世」、「良医往来」などが記されている。

四篇は、「華佗と曹操・關羽について」であって、その虚構と実説について書かれている。案外虚説が広く世にひろまり、それが事実であるような間違いを、正しくときほぐしてくれている。

五篇の「医は仁術」については、かつて先生が医史学会総会で発表されたもので、我々がつい軽く使っている言葉が、古く、重々しいことであつたことを知らせて下さつた。

六篇の「中国における医家と病家へのいましめ」は、多くの文献からこの方面の諺言的なものを抽出されている。

あと三篇は、「本邦初渡來の医学をめぐって」として、おもに記紀から、「医学生のはじまり」では、我が国の医学教育制度の始まりのありさま「山上憶良の文にみられる疾病・医療観」として、彼の七十四歳のときの文から、奈良朝時代、日本古代の病理観や治療内容に及んでいる。

いずれにしる、本書は、先生のテーマの一部分的な集約と思われ

る。その内容は多岐にわたり傾聴すべきものがある。会員諸氏に広くおす次第であり、今後先生の一更の御研究を期待し、次回の御執筆を願つてやまない次第である。

(吉元 昭治)

〔新興医学出版社 平成元年 B五判 五九頁 定価七七二円〕

ネストール・ルハン著、酒井シツ監訳

『歴史上の人物―生と死のドラマ』

本書は、Nestor Lujan: *En la cabecera de los protagonistas de la historia*, 1988 の訳である。著者のネストール・ルハンはスペインの著名なジャーナリストで、原典はスペインの医学文化週刊誌『ハノン』に連載中で、その中から日本人に親しみのある人物三二人を選び、分野別に配列して、一冊にまとめたものである。

巻頭の女王クレオパトラから巻末のギャング、アル・カポネにいたるまで、さまざまな分野で歴史にその名をとどめた男女の病歴と死因とが、練達な筆致でつづられている。

世界的美女クレオパトラは、彼女の甲状腺腫がその美貌をさらに引き立てていたとし、その名高い毒蛇による自殺説には異論をあげている。薬物の知識を持っていた女王の自殺手段としては、蛇毒のほか植物毒あるいは二酸化炭素中毒なども考えられるとしている。

ヴィクトリア女王は、クロホルム麻酔で無痛分娩したことで医学史上でも名高いが、また血友病の遺伝子の保有者でその一族がこの遺伝病に悩まされたことも歴史の暗い話題としてよく知られている。本書にはヨーロッパ中の王室に広がったその遺伝子の悲劇の中で、とくにロマノフ王朝に及ぼした血友病の影響について詳述されている。

文学者では、多病だったゲーテの病歴が興味ぶかいが、名高い彼の臨終の言葉「もつと光を」というのは、実は「ブラインドを開けて、もつと光を入れてくれ」と言ったのが事実で、ほんとうの最後の言葉は、嫁に向かって「こっちに来て、私の手をとってくれ」という、より人間的な言葉であったという。

音楽家では、毒殺説で名高いモーツァルトについて、本書では腎疾患による尿毒症と推論している。

このほか、看護婦の生みの親、光をかかげた聖女といわれるナイチンゲールが実は同性愛であったし、偉大な思想家マルクスは肝臓病で死ぬが、その娘たちも若死にや自殺をした悲劇の一家であったことを教えられる。

通俗的な話題では、ハリウッドの女優リタ・ヘイワースが華麗な半生からは想像もつかないアルツハイマー病で無残な死に方をしたというし、世紀のブリマドンナ、マリア・カラスは心臓病でひどく老いこんで死に、ギャング王アル・カポネは梅毒が死因であったが、ピストルを手に凄んでいた彼もワッセルマン反応の針を刺されるときたいへん怖がったという。

本書は、歴史でよく知られた人物の意外な一面を知ることがで

きるとともに、歴史をつき動かしているのはイデオロギーや思想ではなく、人間の生理ではないかということも、あらためて考えさせてくれるのである。

(立川 昭二)

「メディカルトリビューン 一九九〇年 21 cm × 26 cm

定価三、九一四円」

吉岡郁夫著『身体の文化人類学』

本書には、著者が愛知大学名古屋校で行った文化人類学の講義に際して作成した講義ノートをベースに、世界各国における出土人骨および生体に残された身体変工が、どのような意味を持つのか書かれている。

たとえば、第一の身体変工では、入墨、割礼、ホットントットのエブロン、去勢、頭蓋穿孔といった一二項目についての医学的な所見と同時に、民族的な意味が明らかにされている。入墨という点、現在ではあまり歓迎をされない風習であるが、入墨はもともと種族・男女・階級などを示す標識として、また、医療の目的を持つているという。頭蓋穿孔は古人骨の調査により、かなり昔から世界各地において頭蓋穿孔が行われていたことが知られているが、本書にはその起源、ヨーロッパ、アジア、アフリカという地域での事例と動機が記されている。この頭蓋穿孔は、現在もオセアニアなどの地方で習俗として行われているそうである。

第二部の食人については食人（カニバリズム）をメインに二つの項目が書かれている。食人が実際に先史時代から行われていたかどうか、という点を、著者は数多く文献を用いて検証している。自然人類学的研究視点を尊重しつつ、その視点から離れて民族学的には世界各地の儀礼では、どのような加工が死者の骨になされていたのかなどに着眼しての検証である。

著者の専門は解剖学であるが、医学者の眼から見た身体変工、つまり正常な身体に対して人工的な傷を付けるという事柄について、学際的に民族および民俗学の視点から考察することに重点を置いている。近年、「人類学」という名称の付けられた学問領域は実に多岐にわたっている。戦前において人類学の名称は、現在の形態学・解剖学を主体とした形質人類学を指して用いられていた。一方の文化的な立場の研究については、考古学・民族学の学問領域であった。現在では「人類学」自身の学問領域の定義付けをすることが難しい状態になるほど細分化が進み、様々な方面からのアプローチがなされている。著者があとがきに記している、著者自身の目指す学際的研究の立場は、現在の細分化されすぎた研究体制に対して一石を投じるものと言えよう。

本書は、身体変工とは何かについて書かれたものであるが、身体変工のほとんどが性的目的であることに驚く。性についての認識が、民族によってどのような差異があり、どのような習俗となるのかなどに興味のある方にとっては、著者もまえがきで記しているように、概説書の役割を持つであろう。

（高安 伸子）

〔雄山閣出版 一九八九年 A五判 三一〇頁 定価一、九八〇円〕

丸山博著作集（一）『死児をして叫ばしめよ』
丸山博著作集（二）『いま改めて衛生を問う』
丸山博著作集（三）『食生活の基本を問う』

衛生学というものは、もともと広域にわたる学問であるが、それにしても本書では文化論、福祉論から社会論にまで及んでいるから、驚くほかはない。読者は、ひとりの著者がなぜこのような広範囲にわたって論説を展開できたのかを怪しむかもしれない。そこで私はこのように一見無関係に見えるテーマが、著者の生涯にわたる研究業績としてどのように関連し合っているかを探るために、その底流ともいべきものについて、私なりの考察を述べ、それをもって書評に代えさせていきたいと思う。

丸山先生は衛生統計学者としてスタートし、最初に乳幼児死亡を研究されたので、初期の研究報告である「死児をして叫ばしめよ」には多くの数値やグラフが出てくる。これは当然予想されるところである。ところが、その後の論文には、もはや数値は出てこなくなる。一見、丸山先生は統計学を放棄されたかのように思われるのであるが、実はそうではない。よく見ると、ふつう衛生統計学の論文の終った所から書き始めておられることがわかる。つまり、先生自らが収集し、分析して得られた統計数値を脇に置いて、それをして語らしめるのが先生の論文の体裁なのである。

だから、たとえば森永ひ素ミルク事件における丸山先生は、イデオログでもアジテーターでもなく、いつものようにひとりの科学者なのである。

この意味では、丸山先生は優れた、そして別人にはまねのできないユニークな衛生教育の専門家であると言える。円熟された後の丸山先生の講演集や論文をみると、まるで石田梅巖の石門心学を読んでいような錯覚に陥る。平易に、しかも独特の説得力をもって、衛生における善を説き、読者をぐいぐいと引っばっていかれるのである。このようなカリスマ性は、丸山先生がしっかりと踏まえておられる莫大な衛生統計データの集積に由来しているのだと私は信じる。衛生学におけるこのような大系は、先生独特のものであって、この個性あふるる新しい分野は丸山衛生学と呼ぶにふさわしい。願わくは将来、若い衛生学者がこの後を継ぎ、ひとつの学派として集大成していただきたいものである。

(山本 俊一)

〔農山漁村文化協会 一九八九年 A五判 (一)二八六頁〕

(一)三二六頁 (三)三五八頁 定価各三、五〇〇円〕

誤植訂正

第三十六卷第一号六〇頁「帝国大学医学部薬学科の発展」

(中室嘉祐)の本文八行目

誤 「病院が処方箋調剤を行う」

正 「医師が処方箋調剤を行う」